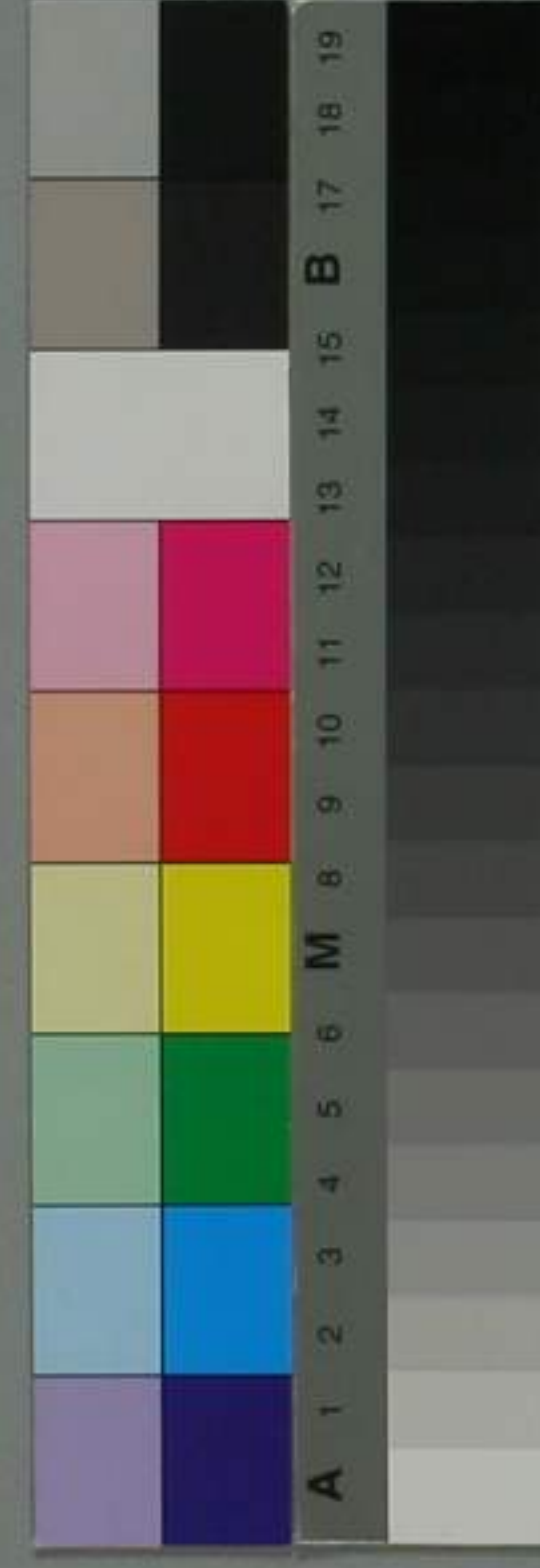


予が今の人のためなるものしる猿蓑抄の中
 其角の序を釋せる段々 五徳といふこと
 解して おづづしきことをいふは宜しか
 らず 高岩徳元の誹諧初学抄 されば誹諧
 には 連歌の終のほうと五つありてはたの
 しみ侍るとりや 第一俗語を用いる事才二は自
 讃し侍りてもさかき事才三取あへず典を催
 才事才四初心の輩学ばなくして和歌の浦をみ
 る心を寄せ侍る事才五は集秀古事未歴るゆ
 かりおとし一白うく典を侍らば何事さ
 らひらく引寄せ侍侍るべし事 是五つの徳
 ありとある 其言うらうて五徳とは用ゐけ
 ん 却つて斯く手通し解し〜ん〜 宣し
 らずべし 誹諧初学抄は 貞徳よりはや
 先輩の徳元の撰りて 初学抄こと誹諧を説
 きつる源頭の書らんば 其角らんは據りて誰
 も知んぬ五徳の文字と下し〜とおぼし 初
 学抄 巻頭の言 甚かぬし 是はた〜さぐて
 の人の時の邪興と ありは地元のかりらぬ
 夢すりこ木 お越を嫌ふべし 式は 花見し
 らみ 春也 東しらみ 時分也 きの利口
 と云へて 畢竟式目等之ものと見え〜り
 と云へる おりろし 凡そ誹諧句體は 連
 歌と俗語を加へて 前句の詞をあ〜ぬ品を取
 りとりて侍侍るさまありとい〜し 依緒
 源頭の當時のさま 侍侍りて見えて 古を敬
 ずべし





特別
交庫14
A85



幸田露伴翁猿蓑初學抄原稿斷片

わが著書明治文藝史上巻所収

中
間
久
権
藏